

新聞「日本」と大正前期「大阪朝日新聞」： リベラル・ナショナリズムの継承と展開(国 際日本学インスティテュート, 修士論文要旨 (2005年度修了者))

有田, 洋造

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

272

(終了ページ / End Page)

272

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020739>

た、終章で明治期の秩序構想を概観し、明治期を通じて秩序観と道徳観の問題は争点であり続け、近世における問題が再現されている様相をごく簡単にスケッチする。

本稿を通じて、「職分」意識は近代的職業意識としての要素を具えつつも、前述した二つの条件を完全に満たしていないという結論を示唆している。すなわち「職分」は、ある場合には人間としての本分、またある場合には政治的秩序への順応を正当化する根拠として機能しつつ、他方で職業倫理として機能するに至ったと考えられる。「職分」意識は、秩序観と道徳観の二つの点で「前近代」性を内包しながら、日本の「近代化」において、一定の歴史的役割を果たしたのである。

<国際日本学インスティテュート>

新聞「日本」と大正前期「大阪朝日新聞」

～リベラル・ナショナリズムの継承と展開～

有田洋造

明治中期～後期の政論新聞として知られる新聞「日本」（以下「日本」と省略）と、大正前期の「大阪朝日新聞」（以下「大阪朝日」と省略）は、ともにリベラルでデモラクティックなナショナリズムを追求したという点で共通している。本稿では、「日本」のリベラリズムやデモクラシーがどのように「大阪朝日」に継承され、展開されたかといった点について、内政論・外政論の両面で分析を試みる。

「はじめに」では、分析の前提として、明治中期から大正前期にかけての新聞を取り巻く状況について説明している。この時期、新聞界は政論を中心とした「政論新聞」の時代から、報道を重視した「報道新聞」の時代へと変わりつつあった。それに伴い、新聞記者も、長谷川如是閑が「文明批評家」という造語で呼んだような「大記者」が姿を消し、専門分化するとともに、新聞社の企業化、組織化も進んだ。「大阪朝日」は「報道新聞」としての性格を強めながらも、「政論新聞」的な要素も取り入れ、部数を伸ばした。一方、「日本」は「政論新聞」としてのスタイルを固守し続け大正三年に廃刊となった。

第一章第一節「両紙の人脈的継承」では、明治中期以降、「日本」の出身者が東西「朝日新聞」の中核を担うようになった経緯を述べている。

第二節「基本精神の継承」では、両紙の論説の基本的性格を説明している。「日本」を主宰した陸羯南はその論説について、営利性や党派性から独立した新聞として、「道理」のみによって立つことを強調した。そうした姿勢は、「大阪朝日」にも「正義正論」の尊重という形で受け継がれたが、同紙の場合、編集側の姿勢を経営側が支持したために「正義正論」を維持できた面も否定できない。

第三節「論説手法の類似」では、両紙が自分たちの主張を世界史的な脈絡の中で位置づけようとしたことを説明している。さらに、「大阪朝日」の場合、それは同時代の世界的潮流に沿っているという「並走観」となった。

第二章「内政論の継承と展開」では、まず両紙のナショナリズムの変質について説明している。「日本」の場合、明治特有の国家意識を持った共同体的なそれだったのに対し、「大阪朝日」の場合、「社会」や「個人」に根ざすものであった。ついで内政の思想面として、両紙のリベラリズムとデモクラシーを分析した。「日本」は国権と民生のバランスある発展という観点からそれらの価値を強調したが、「大阪朝日」はリベラリズムやデモクラシーの追求が自己目的化した。両紙を相対的に比較すると、前者は「国家構成的」なりベラリズムやデモクラシーであったのに対し、後者は官僚的「国家からの」自由、国家から自立した個人によるデモクラシーを目指した。さらに、内政の体制論としては、両紙はともに立憲制の発展を望んだ。立憲制の本旨についての理解でも、国民の権利と自由を保障すると同時に国民の政治参加を促すものと捉えていた点で両紙は共通していた。しかし、羯南は立憲制を国民主義の実現という目的に合わせて活用する「フィクション」として相対的にとらえ、「制度より人」という考えから、政治家の心情を重視する傾向が強かった。それに対し「大阪朝日」は立憲制を民本主義に基づく政党内閣制と同義に捉えていた。こうした認識の違いは、天皇の位置づけの違いにも表れており、「日本」は「執中権」という概念で全体の調整役を期待したが、「大阪朝日」は「君権行使の制限」にまで踏み込む論説を展開した。

第三章「外政論の継承と展開」では、両紙の「対外硬」方針を時代順に説明している。「日本」の外政論は、日清戦争前は政府の「対外軟」の方針への批判としてスタートし、戦後はパワーポリティクスの思考と平和主義的思考の混交となり、やがて政府の大軍拡という既成事実におされる形で日露開戦を積極的に主張するに至る。こうした流れを継いだ「大阪朝日」の外政論は、「内に立憲主義、外に帝国主義」を地で行くものだった。しかし、そこに世界的な民族自決主義の影響と相まって、国内的な民本主義の深化によって他国（さしあたっては中国）のナショナリズムへの理解と共感が間歇的に表れる点に特徴がある。

「おわりに」では、白虹事件が起こった大正七年前後の時代状況を説明している。両紙の模索した開明的なナショナリズムの路線は「白虹事件」で挫折した。民本主義の潮流がインターナショナリズムの性格を強めるとともに、そのリアクションとしてナショナリズムが反動化していく時代状況の中で、事件の発生は象徴的な意味があった。清明だった日本のナショナリズムの源流に近い場所から掬ってきた一滴とも言うべきこの小稿が、近年のトゲトゲしいナショナリズム論が横行する言論界の熱を少しでも冷ますことができれば幸いである。

<国際日本学インスティテュート>

日本アニメの表現形式

呉 恵 京

アニメーション (Animation) はAnimateの名詞形であり、その語源はラテン語のAnimaからきており、「生命を与える」、「生き返らせる」などの意味がある。一枚一枚の絵が異なる「動き」を表わしていたものを、Animation Cartoonと呼んで実写映画と区別しているのが、現在はアニメーションと呼ぶようになった。

日本製のテレビアニメは、毎日のように世界中で放映されている。日本のアニメーション史上に記念すべき出来事は、スタジオジブリの作品で宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』が、日本映画史上最高の290億円もの興行収入をあげ、第52回ベルリ